



Publishing house: 2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2023.11.01

阿弥陀の御いのち

順教寺住職

細川 公英

皆様おはようございます。浄光寺様のお盆の法会のご縁を頂戴致しました、今ほど紹介に預かりました順教寺の細川と申します。今からお時間を暫く頂きます、皆様と共に南無阿弥陀仏のみ教えを聴聞させて頂きたいと、その事一つ願って出てきました。よろしくお願ひ申し上げます。さて本日は皆さまのお手元にプリント一枚お配りさせていただきました。そのプリントに沿ってお話しせて頂こうと思っています。

プリントに書いてございますが、タイトルは「阿弥陀の御いのち」と。これは『安心決定鈔』という御聖教の中にでてくるお言葉です。私達の御本尊、阿弥陀様の御いのちを今私達は等しく頂いておる。その事を今日は考えさせて頂きたいと思ひます。

亡き人の願ひ

まず最初に、今日はお盆の法会でございますから、当然私達

にとつて大事な方、お浄土に先にお歸りになられたその亡き方をご縁として本日の法会があります。こうやってお盆にお参りをさせて頂く。あるいは暑い中をご家族でお墓の方にお参りさせて頂く。当然私達の方が供養をしたいとそういう思いがございますよね。お供えをしたり、お経を勤めて頂いたりして、手を合わせ合掌し、亡き人を偲ぶということですね。

それも大事な事ですが、もう一歩踏み込みますと、実は先にお浄土へお歸りになられた亡き人は、どうやら願ひというものをもちでいられます。ん？何かしな事を言うなと思われ方もいらつしやるかもしれません。亡き人が願ひを持つているとはどういう事や？我々なかなかピンときませんね。でも実は、亡き方は私達に対して願ひを持つています。この娑婆の真ただ中で苦しみ悩み、どこに生きる光があるのか、なかなか見つけることが

出来ず、まさに暗闇の中をもがいているような私達に対して願ひを一人一人にかけて下さつておられるのであります。

亡き人の願ひというのは何でしょう。実はその願ひを明らかにしていくというのが、今日のご縁です。願ひがあるのか、なかなか分からんでしょう。でもどんな願ひか我々はピンとこないから、その事を今日のご縁として仏様の願ひを、亡き方の願ひを改めて共に聞かせて頂く。

亡き方というのはもうお話されませんよね、これは叶わな事ですね。生前の元気な時は一緒に話しておつた。でも亡き方がお浄土にお歸りになられたという事で今まで通りの会話はそれは叶わなけれども、実は無言の問ひ、無言の願ひというものが亡き方にはある。問われているのは我々の方である。何を問われているのか。亡き方はご自分の人生全体をかけて、今この娑婆で

苦悩している私達にいのちというのとは一体どういう在り様なのか、生きるというのとはどういう事なのか、毎日家族と顔を合わせて生活するというのはどういふ事なのか、そういう普段なかなか考えないような人間の根源的な問いというものをもう一度考えて欲しいと。ここで足を止

ば人間の根源的な課題というものをどうぞ明らかにして欲しいと。人間というのとはただこの娑婆に生まれて、亡くなっていく存在ではなくて、私が今ここに生れて生きているという課題というものに気づかされ、それを担っていくようなそういう人間に生まれ変わって欲しいと。

「お母さん」

これは中学二年生のお嬢さんのお言葉ですが、非常に感動致しまして紹介させて頂きます。

お母さん

お母さん、遠い昔私は何も知らなかった。母の涙を知らなかった。長い年月が経って、私はやっと母の涙を知った。

お母さんと今までなかなか分かり合えなかった。子どもとしてお母さんに背き続けていた。

けれど時が経って、時が熟してようやくお母さんの本当の願い、心というものがこの私に届いたのである。ようやく気付く

ことが出来たのである。今までお母さんに背き続けて申し訳ございませんでしたという慙愧の思いと、やっと出あう事が出来たというお母さんとの本当の出会い、何かそういうものがこの言葉に詰まっているような、そういう風に感じた訳です。

私達もそれぞれに今まで親子関係を築いてきましたね。でも子供にしてみたら、親の本当の願いというものがなかなか頂けない。逆に反発するということが多いでしょう。なかなか素直になれない訳です。親は子供の事を思っただけだったり、言葉をかけてたりしているはずだけれど、「いじつかしいな、ほっといてくれ」と反発する。でもその親が亡くなって初めて初めて親の深い願いというものがこの身に知らされる。

「遠い昔」と、中学二年生で遠い昔っていうのは、小さい頃の事なのでしよう。お母さんの事を「何も知らなかった」と。お母さんがあの時流した涙の意

か、何の為に今ここに居るのか、その人生全体の意味をしっかりと亡き方から聞いて欲しいと。

我々は、人生の本当の意味、自分が存在している意味がなかなか分からない訳です。分からないから迷っている訳です。だが、亡き方は迷っている我々に対して、このお盆の法会で合掌して一時でもいいから人生全体の意味を、いのちの願いを聞いて欲しいと。もっと言えば

ことである。もう一回生まれ直す、実はその必然性が人間にはある。これは何かというと仏様の願いを今一度聞かせて頂く。亡き方の願いをもう一度聞かせて頂く。ああ、そうであったか、この事が人間として生まれてきた本来の本質的な意味であったか。今まで何も気づけなかったけど、やっと私は本当の意味での人間として生きる道をお念

味を私は全く知らずに今まで来た。「長い年月が経って私はやっと」、「この「やっ」という言葉が重いのです。ようやく、やっとの事でお母さんの涙の意味を知ったと。そういう事やったのか、ようやく知り得た。知ったという事は、お母さんとお出あえたという事でしょう。こういう事でありましょう。皆様方にもご自分のご両親の事を思い出してみてくださいませ。親というのはいつまで経っても子供の事を願っておられるのでしょうか。

八十四歳の私の父もこの間ですね、急に食事が摂れなくなりましてね。それでおかしいなという事で救急車を呼んで、そして今病院に入院しています。結局、全く自力では食事が摂れないです。ですから点滴をして栄養分を摂る。そうなると飲み込む唾液でも誤嚥性肺炎になる。普通なら食道を通じて胃の方に行くのだけど、筋肉が衰えているから肺の方に行く菌が

繁殖しまして、肺炎になって…と、そういう事で今入院しておりますが、今コロナ禍で面会もかなわない。父がこういう立場になつて、今まで普段何気なく父と顔を合わせていたという事の大切さがやっとなつた。

もつと話をしておけばよかったとか、色んなこと聞いておけばよかったとか。ずっと私も反発できませんでしたからほとんどしゃべる事がなかったです。息子と父親というのは会話がないでしょう。私もしゃべらないし、向こうも話しかけてこない。そういう関係でした。でもようやくね、この中学二年生のお嬢さんの言葉がね、身に染みてきた。

この「お母さん」の所を色々変えてみて下さい。例えば「お母さん」の所を「我が子」と。「我が子。私は遠い昔知らなかった。我が子の涙を知らなかった。長い年月が経って私はやっとなつた。親は子供の涙を知った」。親だから子供の事を分かっている。親だから子供の事を何でも知っている。私

もそう思っていました。子供の事は全部分かっている。そういう慢心の思いでいました。

自分の事を言つて何だけれど、子供が大学生のある時にぼそつと言いました。「お父さん、僕は休み時間になると図書室にずっといた」と。本が好きということもそんなにないし、何で？と聞くと、「教室におりにくい」と。みんなワイワイ、ガヤガヤ遊んだり騒いだりしていますが、どうもそういう場が馴染めないと。

だから誰もいない図書室に行く。そこは独りの空間だから、心が落ち着くというのです。そしてチャイムがなると、「嫌だなあ」とひどい思いしながら教室に戻って行ったそうです。そういう事を私は全く知りませんでした。高校三年間全く。教室で友達と仲良くやっているものと思っていました。またそういう素振りも見せなかった。多分親に迷惑かけたらいけないという思いもあったのだらう。そういう

うことを全く話さなかったけれど、大学生の頃に、ふとその事を言った。ああ、そうやったか。何も知らなかったな。子供の事を知っていると思つていたけれど、何を知つていたのか。百に一つのこと知らないのかもしれない。そのくせ自分は子供の事をよく知っていると思い込んでいた。私自身そういう経験がございません。

今度は「お母さん」の所を「亡き人」に変えてみますよ。「亡き人。遠い昔私は何も知らなかった。亡き人の涙を知らなかった。長い年月が経って私はやっとなつた。亡き人の涙を知った」。こういう事だつてあるのではないでしょう。今まで反発して歯向かってきたけど、その方が亡くなつて、お浄土へお帰りになつてはじめて本当の願い、無言の問いを頂く事ができました。これ、喜びでしよう。現実ではお話が出来なくて寂しいですけど、本当の心を知った。これは何事にも代

えられない喜びではありませんか。その喜びとその無言の問い、願いと一緒に亡き方と共に歩んで行きます。そう思うと寂しい事はないわけです。亡き方どこに行かれたのか？我々は思うわけです。今頃どうされているのかなあと思うわけですが、私達が南無阿弥陀仏と申すところに亡き方がおられます。亡き方の願いが南無阿弥陀仏となって私の身にはたらいで、私が申す南無阿弥陀仏と共に亡き方がそこにおわします。正に亡き方との二人三脚でしょう。人生の再出発です。亡き方の願いと共に、南無阿弥陀仏と共に歩ませて頂く、そんな力強い事はないわけ

でございます。

「私はやっと」の「やっと」という所ね、これは我々の人生そのものでしょう。出あうまでは簡単に出あえない訳です。紆余曲折ある訳です。あっち行ったりこっち行ったり、人生をウロウロしているけれど、やっと出あえた。我々は過去の事を、あ

んな事無ければよかったとか自分で判断しますが、過去の全てが大事なものとして、今出あえたという必然的なものとして、ご縁として受け取ることが出来る、そういう事が南無阿弥陀仏の道として与えられているのかなと思うわけでありませぬ。

私は大学を卒業してお寺に戻ってきたけど、毎日どうやって過ごしていけばいいのか、何をしたらいいのか分からない時を過ごしておりました。そういう時にたまたまのご縁がございました。出あいというのはたまたまのご縁ですね。金沢別院さんの方でお坊さん向けの研修会がございまして、その時松任の本誓寺のご住職の松本梶丸先生が講師としてお話しして下さっていました。その時は全くチンプンカンプン。ただその場にいたというだけでした。けれど先生の一言一言が私の身に響いた。梶丸先生とご縁を頂いて、こういう言葉をいただいた。「細川

さん、共に聞法いたしましたよう」と。その時このお言葉が一体どれだけの意味があつて、どれほどありがたい言葉なのが全く気づきもしませんでした。ふーん、てなもんです。

ただそのお言葉が不思議と私の心に頭にずっとひっかかかっておりました。歳をとって、最近になつてようやくそのありがたさに気づかされました。歳とるのはいい事ですね、我々の思いからすると若い方がいいと、そう思うのだけども歳を取つて、南無阿弥陀仏という仏様のお言葉に少し「ああ、そうか」と頷けるのはやはり年の功ですよ。色んな人生経験を積んできているから。或いは若い時と違ってこの身体が思い通りにいかない。そういう現実を生きているから、仏様のお言葉がより身に沁みる。それで「共に聞法いたしましたよう」というお言葉も最近になつて、「ああ、そうか」と頷けるようになった。これはただならぬお言葉を私にかけて

下さっていたなど。その時とんでもなくありがたいご縁を実は頂戴していたのに、何十年も気づかずに来たのだな。先生のこのお言葉を全くありがたと思わない自分が、この歳になつてようやく、ありがたさを知つた。

この「お母さん」の所を「梶丸先生」と置き換えてみると、「遠い昔。私は何も知らなかった。梶丸先生の涙を知らなかった。長い年月が経って私はやっと梶丸先生の涙を知つた」。なぜ聞法しようとおつしやつて下さった事が大事か。特に浄土真宗は聞法が大事ですよといひます。では聞法は何かというと、「聞」は聞くです。誰が何を聞くかというのが大事でね、まず誰がというと、我が身ですね。我が身、私が何を聞くか。「法」、これは仏法と違って仏様の教えの事です。「法」というのは教え。特に阿弥陀様の教え。もつとわかりやすく言えば南無阿弥陀仏という事です。この私が南無阿弥陀仏の教えを聞

かせて頂く。何でもない事ですけれど、これが一番難しいのです。何故か。私が、私の身になかなか聞けないのです。全部他人事になってしまふ。自分には仏法なんてまだまだ関係ない。一通り歳が回って、定年になってからやと。でも定年といつても皆さん若くて元気ですから、それこそ身体が思うように動かなくなつてからちよつくら仏様の教えでも聞いてもいいかなと。今はまだいらぬ、聞かなくてもいい、というようにしているのです。

弥陀仏の教えを聞きなさいと。これは誰がおっしゃるのか。これは亡き人の願いです。この私に「南無阿弥陀仏の教えを聞いて下さい。南無阿弥陀仏の教えを聞くような人生をどうぞ送って下さい。若い、年寄り関係なく、南無阿弥陀仏の教えをどうぞ聞いて下さい。念仏を申して下さい。南無阿弥陀仏と口に称えて下さい。そしてその教えの云われを聞いて下さい。そういう人間としてどうぞ歩み出して下さい」と。実はそういう事を亡き人は私達に願いをかけて下さっている。いやそんなこと、わしのじいちゃんから言われた事ないとおっしゃるかもしれません。違うのです、無言の問いです。亡き方が人生全体を通してね、問いかけている。目の前にご遺体があるとするれば、そのご遺体が無言の問いとして私にね、「どうぞ念仏申す様な人生を送ってくれ」と、このこと一つだけを願うのである。「どうぞ歩み出してください

い」と、全ての亡き方は私に願いをかけて下さっている。その事の意味を知って、やつと亡き方の願いに気づくことができた。長い間、なかなか私は亡き方の願いがどういうものか分からなかったけれど、南無阿弥陀仏を申す様なそういう人生を歩んでほしいとそういう願いをずっと前からかけて下さっていたのだとやつと気づけた、やつと出あえた、亡き人の願いに。

阿弥陀の御いのち

南無阿弥陀仏を申して欲しいというのには理由がある。理由の事を今から少しお話していきます。プリントの三番。ここに書いてるのは「阿弥陀の御いのち」という『安心決定鈔』の言葉です。蓮如上人はこの『安心決定鈔』を何回も何回も読まれて、黄金を掘りだすようなお聖教だ、読むと黄金が出てくるようなそれだけありがたいものだとおっしゃっています。

しらざるときいのちも、阿弥陀の御いのちなりけれど、いとけなきときはしらず、すこしこざかしく自力になりて、「わがいのち」とおもいたらんをり、善知識「もとの阿弥陀のいのちへ帰せよ」とおしうるをききて、帰命無量寿覚しつれば、「わがいのちすなわち無量寿なり」と信ずるなり。

『安心決定鈔』

いのちの事に関して書いてある。「しらざるときいのちも、阿弥陀の御いのちなりけれど」。「しらざるときいのち」、生まれたばかりの赤ちゃんをみて下さい。生まれたばかりの赤ちゃんは正に阿弥陀様のいのちに最も近い訳であります。自分の計らいはほとんどないわけでしょう。お腹すいたら泣いて、お腹いっぱいになったらまた寝る。お父さんお母さん、周りの家族の方に全てを委ねているで

しよう。自分でご飯を食べることも当然出来ませんし。ご両親の愛情をいっぱい受けて一日のお育ちになる。正に赤ちゃんのいのちが阿弥陀の御いのちである。

けれども「いとけなきときはしらず、すこしこざかしく自力になりて」。人間はだんだん成長してきます。ずっと赤ちゃんのままいるわけにいかない。一歳、二歳、三歳とだんだん自分を主張してくるでしょう。三歳か四歳かその辺りだと思えますが自分を主張するでしょう、嫌な時は嫌と言ってね。さらに小学生、中学生と成長していきま

す。だんだん、こざかしい思いも出てくる訳です。「すこしこざかしく自力になりて」、「自力」というものが出てきます。私が私が、俺が俺がと。

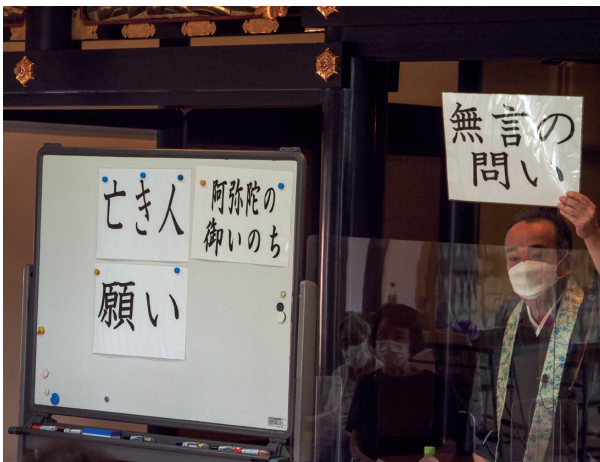
く さ む す び

しの好きな様にして何が悪いとね。人に迷惑かけた訳でもないし、わしの人生やから好きにして何が悪いと「わし」が付くのです。我々はいつの間にか、我がいのちという風に捉えてしまっているのです。これが良いとか悪いとかではなく、我々人間の偽わざる姿であります。わしのいのちやわしのもんや、わしの家族や、全てそういう風から自分のものだ。自分のものだから何をしても良いだろうと、残念ながらそういう思考が人間の自然の流れです。その事に気づくことが出来ない大きな闇を我々は抱えているのです。

自力の問題には、自分では気づけない闇深い根源的な問題がある。例えばどうですかね、いのちという時、やっぱり自分の頭で○×、善と悪などと我々はどうしてもレットルを貼っていきま。若いいのちは○、健康ないのちは○。一方で年老いて、ベッドに横たわっている様ないのちは×や、ああなったらお終

い。このように我が思いや頭でも勝手に判別し、○×をつける様なそういう在り様を我々自然に持っているのです。どうですか皆さん。

先程お話した私の父のようにベッドに横たわって自分で飲む事も嘔む事も出来ず、全て点滴に頼っている。ああいう姿を見ると、これでは生きていく値がないわという判断を下しても不思議ではありません。お金がかかってくるといふ経済的な問題



もありましよう。一日の入院費もかかるし。色々と私達は頭で計算するわけです。口に出さな

いまでも心の中で色々思うわけでしょう。どうしてもいのち自体を○×、良いか悪いか、結果だけで判断する。そういう思考に我々は慣れてしまっている。

学校の試験もそうでした。点数付ける訳ですね。100点の子は優秀だ、30点の子は赤点だと。会社に出てからもそうでしょう。会社で成績の良い人は出世し、営業成績が悪い方は：と。娑婆というのは全てそういう価値観で、そういうものさしで成り立っている。だからなんとなく生きづらさを感じるのでしょう。苦しい、もつとほつと

するような場が欲しい。

先程私の息子の事を言いました。休み時間に図書室に逃げ込む。居場所の問題ですね。教室には居場所が無い。静かな図書室に逃げ込むわけです。そしてらちよつとほつととするわけです。私達人間は、ほつとするよ

うな居場所を求めている。けれど残念ながらこの娑婆にはなかなかそんな安心できるほっとする場所がない。本来なら家庭がそういう機能を果たしていたのかもしれないが、家庭にもそういう価値観が入ってくる。お年寄りも小さくなっていく、若い者に遠慮して。そうするとやっぱり生きづらい。

本来、このいのちというものは阿弥陀の御いのちである。「わがいのちとおもいたらんおり、善知識」。「善知識」というのは私にとって大事な方、あるいは亡き方とそう受け取っていたとしても結構です。その方が「もとの阿弥陀のいのちへ帰せよとおしうるをききて」。亡き方は「もとの阿弥陀のいのちへ帰せよ」とこの私に教えて下さっているわけです。

これが念仏申せという中身です。亡き方は念仏申せとおっしゃった、その中身を紐解くと、「もとの阿弥陀のいのちへ帰せよ」。要するにいのちは、お前

一人のものではないよというこゝとです。自分勝手にいのちに価値を付け、良いだ、悪いだ、こゝうなつたら駄目だ、色々思っているけれど、そういう事は全く無意味なことである。本当のいのちの願いを知らないからそういう態度になる。本当のいのちの意味に気づいて欲しい。頂きたいのちである。様々なご縁、様々な方のお力、我々の計らいを超えて今ここにこのいのちがあるのである。その事実気づいて欲しい。これが亡き方の願い。

「もとの阿弥陀のいのちへ帰せよとおしうるをききて、帰命無量寿覚しつれば」。「帰命無量よくお聞きになるでしょう。」「帰命無量寿如来」と、正信偈の冒頭です。要するに南無阿弥陀仏のことです。「帰命無量寿覚しつれば」というのは、南無阿弥陀仏申せばという事です。念仏申せばという事です。これは仏様、亡き人の「念仏申して下さ

い」、「念仏申す人生を送って欲しい」という願い、これを聞かせていただいた訳です。南無阿弥陀仏申せという仏様と亡き方の願いをようやくこの我が身に受け取る事ができた。その時のちはこうであったか、と初めていのちの目覚めを頂く事ができるのです。

たりとも育ててもらわなければこのいのちを続けることが出来なかつたでしょう。三度三度のミルクを頂き、たくさんの方に支えて頂いてようやくここまで歩ませていただいた。

「わがいのちすなわち無量寿なりと信ずるなり」。こういう視点をお念仏によつて頂ける訳です。「わがいのちすなわち無量寿なり」と、いのちを頂いて今私はここにいます。無量寿というのは計らいを超えているという事です。自分の力でとらえる事が出来ないという事です。よく生かされているいのちつて言葉ありますけどね、このいのちは、遙か昔からのいのちのバトンが私まで届けられてきた。そしてこの人生においても、私の思いを超えて様々な方のご苦労と育みを、いのち一杯私は受け取った。お父さん、お母さんに、もし一日

それは自分の誕生日以前から出発だと思っと思っていますけど、その前の両親がいなければこの私はいないわけでしょう。そうするといのちというのはやっぱりバトンです。受け継がれている訳です。DNAとか科学的な検査もありますけれど、正に人類の歴史と共にこの私のいのちがあつた。仏様を見るいのちというのは、長い歴史のいのちをおっしゃるのです。これは無量寿という意味です。誕生日がスタート、そんなちつぽけないのちではないということです。何十億と人間はずっと来ている訳です。そういういのちを様々な方のご苦労頂いてこの私のいのちを頂いておつた。仏様から願われ、色んな方から願われて育

まれて、念仏申しておくれ、共に念仏申そうぞ、という励ましの声をずっとこの身に受けていたけれど、その声になかなか願う事が出来なかつた。わしのいのちや、わしやわしやという事ができた。でもようやく今その事が本当に恥ずかしい事であった、本当に傲慢な事であったと初めて下がらん頭が下がった訳でしょう。仏様の教え、亡き方の願いに出あって。頭が下がるって大事な事ですよ。自分の力で下げるのではないです。はからずも頭が下がった。教えに出あって、亡き人の願いに初めて気づいて。亡き父は、亡き母は、亡きおじいちゃん、亡きおばあちゃんはこの事を私に願っておられたのか。念仏申す人になって欲しい、その事一つだけを願われておったのだ。

いのちの歌

竹内まりやさん。素敵な歌手ですね。素晴らしい作品をたく

さん出しておられます。この「いのちの歌」は紅白でも歌われたと思います、今だったらユーチューブなんかで簡単に見れますから、ご縁があつたら聴いて頂きたいです。この歌詞がね、私好きでね。正に無量寿のいのちという事を歌った歌詞やな、正に阿弥陀の御いのちを竹内まりやさん風に表現された、これは私が勝手に思っている。竹内まりやさんがどんな思いでお書きになったか存知あげませんが、今日はこの歌詞を読んで終わりにしようかと思えます。

いのちの歌

生きてゆくことの意味
問いかけるそのたびに
胸をよぎる
愛しい
人々のあたたかさ
この星の片隅で
めぐり会えた奇跡は
どんな宝石よりも
たいせつな宝物
泣きたい日もある

絶望に嘆く日も
そんな時そばにいて
寄り添うあなたの影
二人で歌えば
懐かしくよみがえる
ふるさとの夕焼けの
優しいぬくもり
本当にだいじなものは
隠れて見えない

ささやかすぎる日々の中に
かけがえのない喜びがある
いつか誰でも
この星にさよならを
する時が来るけれど
命は継がれてゆく
生まれてきたこと
育ててもらえたこと
出会ったこと笑ったこと
そのすべてにありがとう
この命にありがとう

竹内まりやさんの曲で聴いて頂けるともっと歌詞の深み、重み私達の身に響いてくる。こういうお言葉に出あうと身が響くでしょう。こういういのちを頂いているのです。こういう真

実の言葉に出あうと、ああそうかと身が喜ぶ訳です。これが人間のいのちの不思議な構造です。人間に生れてきた喜びではないでしょうか。いのちが喜ぶのです。これ、私の頭が喜ぶのではないのです。全身が喜ぶのです。今日は阿弥陀の御いのちということでお話しさせて頂きました。

《編集後記》

◇本文は令和四年八月十三日、浄光寺「追弔会」の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させて頂きました。

行事のご案内

「除夜の鐘」

大晦日・午後十一時半～

「修正会」

元旦・午前零時～

「きこまいけ」(聞法会)

毎月・二十八日 午後二時

※十二月～二月は休講